会報JAMT
JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS
発行所
一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会
発行責任者　横地常広
編集責任者　深澤恵治
〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号
TEL (03) 3768-4722　FAX (03) 3768-6722
ホームページ http://www.jamt.or.jp

P1～P4 第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会参加報告
P5～P6 2024年度 日臨技臨床検査精度管理調査総合報告会開催のご案内
P7 「病棟業務とタスク・シフト／シェア推進」講習会を開催
P8 令和６年度 認定救急検査技師制度 第２回指定講習会（九州）開催報告

第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会参加報告

学会概要

第62回大韓臨床病理士協会（以下KAMT）総合学術大会が令和６年８月30日（金）～８月31日（土）を会期として韓国仁川広域市Songdo Convensiaで開催されました。KAMT総合学術大会での総参加者数は3,140名でした。日本からは国際シンポジウム発表者２名、学生フォーラム発表者１名、及び一般演題（示説）26件、を含む41名での参加となりました。台風の影響が心配されましたが、多少の遅延はあったものの飛行機は無事に到着し、参加者は29日（木）よりWelcome Reception へ参加し国際交流がスタートしました。30日（金）にはテープカットセレモニー、開会式、と学会開催が華やかに宣言されました。国際シンポジウムでは感染症、精度管理について各国の状況が報告され、活発な質疑応答が行われました。学生フォーラムではAIと臨床検査に関して、将来を担う学生達の視点から発表が行われました。31日（土）にはEONE Laboratories へのラボツアーが行われ、韓国の最先端である検査センターを見学しました。３日間の日程を完遂し、全員が無事に帰国しました。

（国際活動WG委員長　濤川 唯）

日韓代表者会議 report

日韓代表者会議参加者一同

派遣最終日の８月31日（土）に開催された日韓代表者会議に代表団３名（横地会長、竹浦副会長、西浦副会長）と随行者（小松専務理事、菊地理事、事務局加藤次長と李部長）が出席しました。代表者会議では、李光雨（ｲ･ｸﾞｧﾝｳ）協会長より「第62回KAMT総合学術大会」への歓迎の挨拶と「第73回日本医学検査学会」のお礼を、横地会長からは招聘へのお礼の挨拶が述べられました。また、第63回KAMT総合学術大会が蔚山（ウルサン）において2025年９月20日～21日に開催予定であることがKAMTより報告されました。また、第74回日本医学検査学会が大阪において、2025年５月11日～12日に開催される旨を、当会より報告しました。議題は、①2025年開催予定の双方主幹学会の開催予定日について、②日本側の法令改正を伴う行為（タスクシフト・シェア）について、③IFBLS2026について、④学術協定の見直しについて協議されました。特に、タスク・シフト/シェアについてKAMT側の関心が高く活発な意見交換が行われました。最後に、今後もJAMT-KAMTの良好関係の継続性について確認し合いました。

（国際活動WG担当理事　菊地 良介）

国際シンポジウム

小松 京子
（日臨技専務理事/
つくば臨床検査教育・研究センター理事長）

The 62nd Annual Congress of the Korean Society of Clinical Pathologistsの国際シンポジウムのテーマは、「Sharing and standardization of Laboratory Medicine information using digital platforms future design through」であった。私は2014年に日本臨床衛生検査技師会(日臨技)と日本病理学会他臨床関連の学会が連携して実施している、日本病理精度保証機構の設立経緯や、組織活動に関しての報告を行った。日臨技は本機構に副理事長他数名を理事として派遣しており、派遣された技師は、病理の免疫染色の技術や判定に関して、バーチャルスライドなどを活用した精度保証プログラムの提供や標本評価に関わっている。現在は遺伝子の品質など、その精度保証の範囲は拡大している。その他の演題はデジタルプラットフォームを利用した診断検査医学情報の共有と標準化による未来設計（韓国）、台湾医療センターのHIMSS認証経験(台湾)、共にする革新：診断検査医学認証と標準の統一（韓国）、院内感染症サーベイランス（Japanese Nosocomial Infections Surveillance（JANIS））の紹介(日本)であった。興味深い内容ばかりで、私自身も非常に勉強になった。海外では質問するのが礼儀であるとの意識があり多数の質問があったが、そのため時間が押してしまったようで、私以降の先生には積極的に質問を求めず、時間通りに終えた座長の采配も高レベルであると感じた次第である。国際シンポジウムは各国の最先端の情報の発信場所である。本セッションの益々の発展を祈念する。

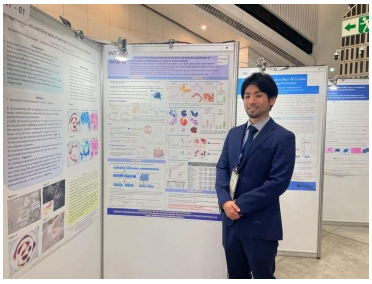
上地 幸平（京都橘大学 健康科学部）

この度は、「The 62nd Annual Congress of the Korean Society of Clinical Pathologists」の国際シンポジウムにおける発表の機会を与えていただき、ありがとうございました。

本シンポジウムは「Sharing and standardization of Laboratory Medicine information using digital platforms future design through」という大変難しいテーマであり、私は日本の感染症のサーベイランスシステムの現状について発表させていただきました。英語ができない中での国際シンポジウム発表は緊張し、日本の感染症サーベイランスシステム：Japanese Nosocomial Infections Surveillance（JANIS）や感染症発生動向調査、に興味を持っていただけるのか不安でしたが、共に参加していた先生方にサポートいただき、無事に役割を全うできたのではないかと思います。今回、諸先生方と交流できた他にも、短い時間ではありましたが、検査センターのラボツアーへの参加やボートに乗って仁川の夜景を楽しむことができました。非常に貴重な経験をさせていただきましたこと、改めて心より感謝申し上げます。

一般演題発表

小林 剛（放射線影響研究所）



ポスター発表会場にて

この度、第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会（KAMT学会）に、ポスター発表者として参加させていただきました。私は尿細胞診における免疫染色併用の有用性に関する発表をさせていただき、Outstanding Poster Award を受賞いたしました。これまで研究のご指導をいただいた諸先生方をはじめ、陰ながら支えてくださった上司・同僚・後輩など、様々な方々のご支援・ご協力の賜物だと確信しております。

実は私は５年前の2019年にも本学会に参加し、ポスター発表を経験させていただきました。その当時の私はまだまだ甘ちゃんで、とても浮足立っていたのが記憶に新しいです。発表の際も、座長の先生からいただいた質問に関して、頭の整理がつかないまま、まとまっていない英語の羅列で自信満々に答えてしまったのを覚えています。自分でも何を言っていたのかよくわかっていなかったので、おそらく座長の先生は困惑していたのでしょう。終始苦笑いでした。それにも関わらず、すがすがしい達成感を感じていた自分がいたのです。今思えばただの自己満足にすぎませんでした。

しかし、年齢と経験を重ねた今回の私は一味も二味も違ったと自負しております。今回の発表はポスター前でディスカッションをする形式でした。そして、私のポスターを見に来てくださった韓国やインドの方々に、一応準備してきた流れで簡単に研究の説明をさせていただきました。しかし、ここからが成長した私の本領を発揮した瞬間でした。説明をしながら、相手が何を聞きたいのか、そして相手は私の発表に何を求めているのか、冷静沈着に分析するもう一人の私、リトル小林が脳裏に現れたのです。そして、相手が興味を抱いていそうな箇所は重点的に説明し、そうでもなさそうな箇所は適当に流す、そう、抑揚をつけたプレゼンを自然にすることができたのです。ディスカッションの際も、辿々しい英語ではありましたが、相手が納得するまで辛抱強く説明できたかなと実感しております。

このような国際舞台というのは、一回経験しただけで満足してはなりません。複数回経験することによって、国際感覚というのは少しずつ研ぎ澄まされていくと個人的には感じています。もちろん、今回反省すべ

き点はしっかり反省し、2026年に日本で開催される世界医学検査学会ではさらにレベルアップした状態で、臨みたいと考えています。

また、KAMT学会への参加・発表のみならず、韓国の検査施設の見学（ラボツアー）や、韓国のロマンチックな夜景を堪能できるシーボートツアーなど、ワクワクする企画も多数用意されていました。JAMTからの参加者を含め、様々な方々との交流も深めることができ、本当に充実した３日間でした。このような大変貴重な経験の場を設けていただき、JAMTおよびKAMTの皆様には心より御礼申し上げます。

雨宮 健司　（山梨県立中央病院）

参加された各国の皆様と

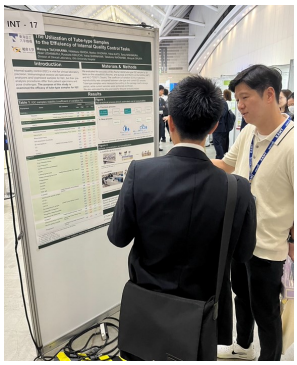
今回縁あって令和６年８月30日(金)-８月31(土)に韓国仁川広域市のSongdo Convensia で行われた第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会に参加しました。大型台風の最中でしたが無事全員現地に参加することができました。国際シンポジウム、国際学生フォーラムを拝聴し、特に学生のAIに対する意識の高さに驚きました。私はポスターセッションで発表させていただきましたが幸運にもOutstanding Poster Awardを受賞することができました。会期中、ソーシャルツアーやイウォン医療財団の見学もできとても有意義な経験ができました。道中皆様に色々とご迷惑おかけしましたが、日臨技会長の横地様、副会長の竹浦様、西浦様を始め、日臨技役員、事務局の皆様、また参加された皆様に心より感謝いたします。

宮尾 章汰（大阪府済生会中津病院）

一般演題発表者の皆さんと（筆者：右端）

この度、第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会にポスター発表者として参加させていただきました。本学会に参加するに至った経緯として、以前より国際学会に強い関心を抱いておりました。本学会では、国際シンポジウムや国際学生フォーラム、そして他のポスター発表を拝聴し、多くのことを学ばせていただきました。私自身のポスター発表においては、ご質問をいただいた先生方と多くの意見交換ができ、韓国の検査の実情をご教示いただきました。また、日本と韓国の検査に対する考え方や相違点についても深く学ぶことができました。さらに、現地の検査センターへのラボツアーでは、施設の規模の大きさに圧倒されました。今回、私にとって最も大きな財産となったのは、多くの方々との出会いです。諸先輩方が気さくに話しかけてくださり、とても刺激的で有意義な時間を過ごすことができました。この学会参加を通じて得られた学びやモチベーションを糧に、今後の国際活動にも精進していきたいと考えています。最後に、横地会長をはじめ、日臨技関係者および貴重な時間を共有できた方々に心より御礼申し上げます。

立川将也（岐阜大学医学部附属病院）

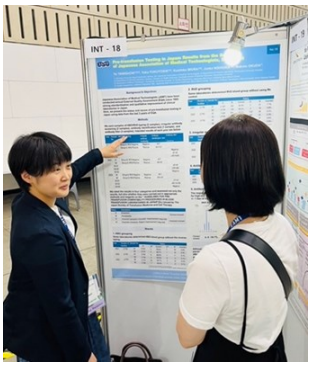


一般参加者からの質疑に答える筆者

この度、第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会にポスター発表者として参加させていただきました。以前までは一般病院に勤めていたため、自身が国際学会は参加、発表できるとは夢にも思っていませんでしたが、この経験は私にとって非常に貴重でした。一般参加者との質疑応答の際には英語のリスニングに苦慮しましたが、なんとか受け答えをし、ディスカッションを進めることができました。学生フォーラムやシンポジウムやポスター発表では多くの学びがありました。グローバルな環境での交流は、新たな視点を提供し、私の考え方を広げる助けとなりました。この経験を今後の臨床検査技師活動に活かし、より深い専門知識と国際的な視野を持つ技師に成長したいと考えています。また、日本から参加された方々とのネットワーキングの機会もあり、多くの専門家と知り合うことができたのは大きな収穫でした。横地会長をはじめJAMT、KAMTおよび関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後になりますが、出張を快く送り出してくださった職場の皆様に、心より感謝申し上げます。

谷口 容
（日臨技精度管理部会輸血検査WG/金沢大学附属病院）

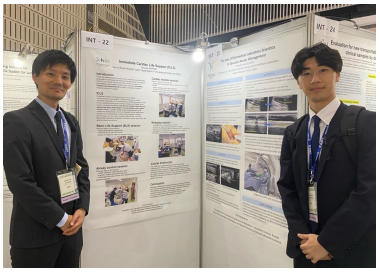


一般参加者からの質疑に答える筆者

2024年８月30日から８月31日に仁川広域市で開催された「第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会」に参加させていただきました。以前より、海外の学会に参加したいという想いがあり、日臨技HPで一般演題募集を見つけ、応募しました。“Pretransfusion testing in Japan: results from the survey of Japanese Association of Medical Technologists, 2022-2024”について発表し、他国の技師との意見交換をす

ることができました。国際学生フォーラムでは、各国の学生さんが流暢な英語で堂々と発表される姿に刺激を受けました。そのほか、美味しいお食事・観光・ラボツアーなど盛り沢山で、大変有意義な時間を過ごすことができました。最後に、このような機会を与えてくださった会長・副会長をはじめ日臨技事務局の皆様、発表においてご指導くださった輸血検査WGの皆様に感謝いたします。

松重 智大（博愛病院）



ポスター発表会場にて

この度、第62回大韓臨床病理士協会総合学術大会に参加し、ポスター発表を行いました。そして今回の発表が「Outstanding Poster Award」を受賞することとなり身に余る光栄です。本学会に参加した経緯は、第74回日本医学検査学会を鳥取県が担当し、視察とPRを兼ねて鳥臨技会長以下学会実行委員メンバー数名が参加するという話を聞き、このような機会は滅多にないと思い、自ら発表者として参加を決意しました。私は英語が得意というわけではないので、抄録やポスターの作成、当日の発表など不安しかありませんでしたが、英語論文を読んだり、翻訳ツールなど活用したりして準備を進めました。語学力は一朝一夕に身につくものではないため、当日の発表については実力不足を痛感しました。

準備に費やした時間も含めて本学会に参加したこと自体が私にとって大変貴重な財産となりました。また現地の方と交流して、言語が異なっても、『話したい』『伝えたい』という気持ちが一番大切であると感じました。この経験を思い出として終わらせるのではなく、これからに活かしていけるように精進していきたいと思います。また、私のように英語が得意でなくても参加できるということをこの記事を通して知ってもらい、来年のKAMT学会に多くの方が応募・参加されることを願っております。

最後に、貴重な経験をさせていただいたJAMT、KAMT、および関係者の方々に心より御礼申し上げます。

学生フォーラム

下浦 椎名（神戸常盤大学）

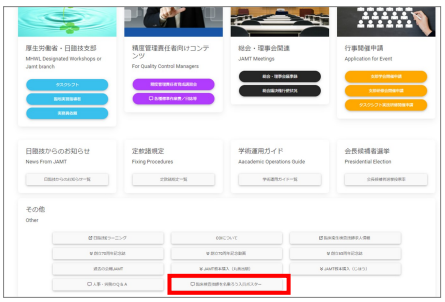
2024年８月30～31日に韓国の仁川広域市で開催された、第62回 大韓臨床病理士協会総合学術大会での国際学生フォーラムに日本代表学生として参加させていただきました。

発表テーマ「AIとビッグデータ時代を準備する臨床検査技師の役割(サブテーマ:AIとビッグデータ時代に臨床検査学を主導する検査法の予測と臨床検査技師が身に着けるべき価値観)」に対し、私は The advent of AI-based online medical treatment and the presence of Biomedical Laboratory Scientists(AIによるオンライン診断の登場と臨床検査技師の存在)のタイトルで口頭発表を行い、Best oral presentation awardをいただくことができ、大変光栄に思います。

訪韓中は、国際学生フォーラムに参加した韓国や台湾の学生や日本から参加した方々との交流、EONE Laboratriesの訪問など、様々な貴重な経験をさせていただくことができました。この経験を活かし、今後も国際的に活躍していける臨床検査技師になるため、日々の勉学に加え、語学力の向上に努めていきたいと思います。

このような貴重な機会を設けていただいた学会関係者の皆様、日本臨床衛生検査技師会の皆様、発表の準備を支えて下さった先生、家族に心から感謝申し上げます。

「臨床検査技師を名乗ろうポスター」は会員専用ページからダウンロードできます



会員専用ページ⇒
「臨床検査技師を名乗ろう入賞ポスター」

2024年度 日臨技臨床検査精度管理調査総合報告会開催のご案内

開催案内

会期：令和６年11月23日（土）
午前９時30分～午後５時25分　予定

会場：幕張メッセ 国際会議場２F
コンベンションホール
〒261-8550
千葉県千葉市美浜区中瀬2－1　２F

交通：◎JR京葉線「海浜幕張駅」徒歩５分
◎JR総武線・京成線「幕張本郷駅」から
「幕張メッセ中央」行きバスで約17分
会場周辺地図は、「幕張メッセ」のホームページを参照ください。
https://www.m-messe.co.jp/access/

内容（予定）：
検査部門ごとに調査項目数が異なる点を考慮した報告時間の配分など、より効果的な報告会としたくご理解、ご協力をお願いいたします。

受付：９時00分～
2024年度 日臨技臨床検査精度管理調査報告
（敬称略、順不同）

臨床化学検査	山本　裕之
免疫血清検査	久保　光史
微生物検査	口広　智一
POCT(感染症項目)	原　祐樹
血液検査	福田　幸広
細胞検査	遠藤　浩之
一般検査	大沼　健一郎
生理検査	坂下　文康
	立田　顕久
	神野　雅史
	堀内　正志
	山本　雅史
輸血検査	福吉　葉子
病理検査	吉田　美帆
遺伝子検査	三澤　慶樹
SARS-CoV-2遺伝子(核酸増幅)	中桐　逸博
バーチャルスライドを用いた調査	石田　克成

※演者、発表順、発表形式が変更になる場合があります。

※時程は次ページをご参照ください。

生涯教育研修制度：基礎教科20点

募集人数：会員（Webによる公募）800人 ＋
非会員（申込書による公募）50 人
＝ 合計 850 人
※先着順となります。

参加費：無料

参加資格等：「2024年度日臨技臨床検査精度管理調査」に受検した施設の方

申込期間：令和６年10月２日（水）～10月21日（月）
（定員になり次第締め切り）

申込要領：日臨技会員の方は、会員専用ページの「事前参加申込」からお申込みください。
当会会員の方は、当日参加受付をしますので、会員証を忘れずにご持参ください。
非会員の方は、ホームページに掲載の申込書に必要事項をご記入し、FAXで下記までお申込みください。
※お申込み締切後は一切受付けません。
※開催案内をよくお読みください。

申込先：〒143-0016　東京都大田区大森北4-10-7
一般社団法人　日本臨床衛生検査技師会
TEL 03-5767-5435　FAX 03-3768-6722

資料：当日配布する紙資料はありませんが、開催期間中のみWeb上でデータ資料が閲覧できます。
※館内にフリーWi-Fi環境はありません。

主催：一般社団法人　日本臨床衛生検査技師会

注意事項：
1．参加は事前参加受付のみとなり、申込み締切後のお申込み（定員に達した場合も含む）、当日参加のお申込みはお受けできません。
2．代理出席は一切認めません。
3．会場内ではマスク着用と手指消毒のご協力をお願いいたします。
体温が37.5℃以上の方、体調が優れない方は、入場をお断りさせていただきます。
※運営担当者の指示に従わない場合は、参加をお断りする場合があります。

持ち物：
【会員】　会員証、ネームカード※
【非会員】申込書（当会受理済）、ネームカード※
※申込みが確定された方のみ開催約１週間前より順次発送予定です。

時　程

開催日時：令和6年11月23日（土）午前9時30分～午後5時25分
開催場所：幕張メッセ　国際会議場2F　コンベンションホール
〒261-8550 千葉県千葉市美浜区中瀬2－1　2F

9：00～9：30　受付

9：30～9：50　開会、会長挨拶　司会　神山　清志
日本臨床衛生検査技師会　代表理事会長　横地　常広

【　第１部　】　司会　宇城　研吾

9：50～11：15　生　　理
【心電図】　立田　顕久（東京女子医科大学附属　足立医療センター）
【超音波】　神野 雅史（東京都済生会中央病院）、堀内 正志（東京都立松沢病院）
【呼吸機能】　山本 雅史（北海道大学病院）
【神経生理】　坂下 文康（三重県立総合医療センター）

11：15～11：25　質疑応答Ⅰ（生理）

11：25～11：30　休憩

【　第２部　】　司会　早坂　光司

11：30～11：50　病　　理　吉田　美帆（神戸大学医学部附属病院）
11：50～12：15　細　　胞　遠藤　浩之（済生会新潟病院）
12：15～12：30　遺 伝 子　三澤　慶樹（東京大学医学部附属病院）
12：30～12：45　SARS-CoV-2 遺伝子（核酸増幅）　中桐　逸博（川崎医療福祉大学）
12：45～12：55　質疑応答Ⅱ（病理、細胞、遺伝子、SARS-CoV-2 遺伝子）

12：55～13：35　昼休み（40分）

司会　藤田　孝

13：35～13：50　体細胞遺伝子検査の精度管理調査に向けたトライアル調査報告
北里大学病院　山下　和也

13：50～14：10　バーチャルスライドを用いた調査の総括
広島大学病院　石田　克成

14：10～14：20　今後の日臨技精度管理調査について
日本臨床衛生検査技師会　常務理事　神山　清志

【　第３部　】　司会　早坂　光司

14：20～14：35　一　　般　大沼　健一郎（神戸大学医学部附属病院）
14：35～14：55　微 生 物　口広　智一　（公立那賀病院）
14：55～15：10　POCT（感染症項目）　原　祐樹　（日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院）
15：10～15：30　輸　　血　福吉　葉子　（熊本大学病院）
15：30～15：45　質疑応答Ⅲ（一般、微生物、POCT、輸血）

15：45～15：50　休憩

【　第４部　】　司会　藤田　孝

15：50～16：15　臨床化学　山本　裕之（京都府立医科大学附属病院）
16：15～16：35　免疫血清　久保　光史（済生会和歌山病院）
16：35～17：05　血　　液　福田　幸広（船橋市立医療センター）
17：05～17：20　質疑応答Ⅳ（臨床化学、免疫血清、血液、精度管理調査全般）

17：20～17：25　閉会の挨拶　精度管理部会　担当理事　宇城　研吾

※司会は精度管理担当理事です。
※演者、発表順、発表形式が変更になる場合があります。

「病棟業務とタスク・シフト／シェア推進」講習会を開催

法改正により「タスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会」の受講が進む中で、「病院の理解」「教育体制」「技師のやる気」など施設ごとの様々な課題により、臨床検査技師の病棟業務への参画、タスク・シフト/シェアが進んでない施設も多いことから、進め方や始める下地作りの第一歩を支援するため、オンデマンド配信とステップアップ版となるZoomによるオンライン講習で「病棟業務とタスク・シフト/シェア推進」講習会を開催しました。

受講者より感想をお寄せいただきましたので、紹介いたします。

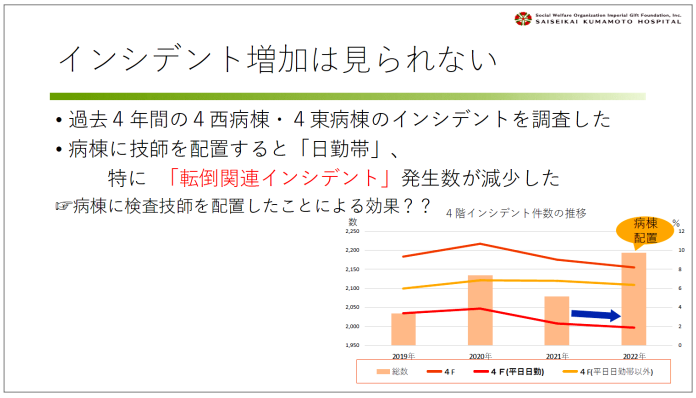
金子　紀子（山形県立河北病院）

令和６年９月23日開催の「病棟業務とタスク・シフト/シェア推進」講習会 Zoomオンライン講習会に参加させていただきました。この研修会では、日臨技代表理事会長の挨拶、講演１　医師の働き方改革を進めるための「タスク・シフト/シェアの取り組み」、講演２　病棟へ送り出す技師長としての観点から、講演３　病棟業務やタスク・シフト/シェアの取り組みを間近で見てきて思うことを拝聴し、午後からは受講者でディスカッションを行い、意見交換をしました。

横地会長のご挨拶では、新たに業務範囲に追加された10行為を行うにあたり、厚生労働大臣の指定する「タスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会」を受講すれば行っていいのではなく、新たに行うためには、各施設内できちんとした技術を習得できる教育体制を構築し、習熟度を他職種から評価してもらう仕組み作りも必要ということでした。また、各施設で抱えている課題を拾い上げて、解決方法に「技師がかかわれないか？」を考え検査部として前向きに取り組んでいくこと、決してかっこいいことをしなくていいとおっしゃっていました。私は「タスク・シフト/シェアで何をすればいいのだろうか？」と漠然に不安を抱いていましたが、「できることから取り組んでみよう！」と考えが変わり、背中を押していただいたように感じました。

講演１は、心血管エコー検査を主軸として病棟で業務されている好事例の紹介でした。技師が病棟で検査を実施することによって、患者さんを病棟から検査室へ移動することに伴う危険が排除できたこと、病棟看護師の業務軽減（患者搬送前後の作業がなくなった）に繋ったとのことでした。

講演２は、技師長の観点からの講演でした。人選には、コミュニケーション能力が高く、検査全体を理解しており、検査データを多面的に解析できる人材、いわゆるベテラン技師が適しているとのことでした。また、技師長として、人材育成による新たな知識・技術習得の個人の負担への心情の酌みとり、個人の事情



臨床検査技師が病棟で業務することの好事例（講演１より）

（適性やライフステージ）への配慮、教育のための欠員による現場負担増の軽減など適切に対応しなければならないことを学びました。

午後からは、受講者全員で1. 意識改革、2. 余力の確保（マンパワー不足をどう解消するか）についてディスカッションを行いました。午前中では聞けなかった各施設の苦労話や現状の課題解決に向けての取り組み、解決へのアドバイス等について活発にディスカッションを行いました。また、受講者の所属施設の規模や職員数、職員の年齢構成等が違うことから、自分では発想できない意見や話題を聞くことができ、新鮮な気持ちで意見交換ができました。2. 余力の確保（マンパワー不足をどう解消するか）では、ローテーションを行い技師の技量を高める、限られた人員で効率よく業務が遂行するよう工夫する（各検査室の曜日別、時間別の業務量を把握し、多忙な時間帯に適正な人員を配置する、業務内容によって開始時間を調整する等）、毎日のメンテナンスが簡便な検査機器を導入する等、意見が挙げられました。今後の取り組みとして、人材育成ための教育時間を捻出し、他職種で協働できる技師を育成すること、また、院内で抱えている課題を見つけ、解決に「技師がかかわれないか？」と常に考えることを行っていきたいと思いました。講習会の関係者の皆様、並びに受講生の皆様のお陰で有意義な時間を過ごすことができました。感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和6年度 認定救急検査技師制度
第2回 指定講習会（九州）開催報告
テーマ： 症候としての意識障害・循環障害

認定救急検査技師制度は、救急患者の診療において適時かつ適切に対応することができる臨床検査技師の育成ならびに知識と技術の普及のために設立された認定制度です。

認定試験受験及び資格更新に受講が必須となっている、認定救急検査技師制度指定講習会では救急診療の情報を把握し救急診療を理解すること、救急患者に対して現状の検査機器を有効に用い安全・迅速・円滑・適切な検査ができる技術や知識、といった認定救急検査技師に必要な知識・技術を習得していただくことを目的に、テーマ毎の講習を行っています。

令和６年度の第２回指定講習会（九州）は症候としての意識障害・循環障害をテーマとして、オンデマンド配信受講後に会場で症例検討のグループワークを行う形式での開催となりました。受講者からの感想を紹介します。

≪内容≫

●オンデマンド配信

意識障害の鑑別について　鹿児島大学病院　中村 政敏

胸痛について　都城医療センター　井本 達也

●現地開催

救急検査総論　近畿大学病院　津田 喜裕

意識障害症例　久留米大学病院　牟田 誠矢

循環障害症例　枚方公済病院　薮 圭介

（敬称略）

徳永 翔（天神会新古賀病院）

今回の指定講習会は救急検査総論の講義と意識障害、循環障害の症例検討が行われた。講義で救急医療に対する需要の増大に伴い、臨床検査技師もバイタルサインを理解し、臨床に参加できる力と緊急度を理解した報告を行う力が必要と学び、それを踏まえて症例検討を行った。

意識障害症例は意識障害、血液ガス、各種検体検査の評価を行い、病態と対応処置について学んだ。検査値を評価することには慣れていたつもりだったが、患者への対応処置まで考えが及ばず、今後さらに学ぶ必要があると思った。

循環障害症例は心電図・エコーの所見と検体検査項目の値をみてディスカッションを行った。普段生理検査に携わっていないが、同じグループの生理検査担当の方と意見を交わしながら循環器疾患について学びを深めることができた。

今回の指定講習会で専門性を活かした報告や臨床支援を行うことが、患者への適切な処置に繋がることを改めて感じた。データの背景に患者がいることを常に意識した結果報告を行いたいと思った。

嶺山 祐里香（医療法人 聖比留会 セントヒル病院）

令和６年度認定救急検査技師制度、第２回指定講習会（九州）に参加させていただきました。講習会はオンデマンド配信と会場型グループワークの二部構成でした。今回のテーマは「症候としての意識障害・循環障害」で、目的は「救急初期診療で必要な知識の習得、検査結果の判読」でした。講師は６名の先生方が務められ、第一線での豊富な経験をもとに、今後に役立つ心構えや知恵を熱意とともに授けてくださいました。

座学では救急初期診療の流れ、意識・循環障害を起こす疾患へのアプローチ方法を学びました。特に印象に残ったのは、「バイタルサインの乱れは生命の危機！」という津田先生のひとこと。病態把握の突破口はバイタルサインなのだと強く感じました。また、バイタルサインは検査技師でも測ることができるため、活躍の場が増える喜びに胸が躍りました。

グループワークでは、４人一組となって提示された症例に取り組みました。知識を出し合い、みんなで協力してひとつの課題に挑むようすはまさにチーム医療そのもの。会場の雰囲気もとてもなごやかで、どの講義もたのしく受講することができました。ありがとうございました。

（編集後記）令和６年８月30～31日に韓国・仁川で開催されたKAMT学会においてポスター発表をさせていただきました。今までは「言語の壁」が大きくあと一歩が踏み出せずにおりましたが、英語力初級の私でも翻訳ソフトと国際WGの皆様のおかげで挑戦することができました。また海外の技師達との交流で新たな知見や発見があり視野も拡がりました。11月末には2024年度日臨技認定試験も開催されます。皆様の学びや挑戦をしっかりサポートできるよう自らも精進し全力で取り組んで参ります。「Let’s all work together for our future !」（高野）